

開け放した居間のソファで朝刊を繰っていた私は、「あつ」と声を洩らした。
地方版の隅に、〈平安初期の送葬場の跡か？ 人骨の一部発見〉という小見出しを見つけたのだった。

古代史とか発掘とかには門外漢の私が、ただこれだけの見出しに驚くということはないのであるが、その小見出しに続くさらに小さな〈太宰府市役所北方約一・五キロ〉という、細字の見出しに目を奪われたのだった。

太宰府市役所北方約一・五キロ……。

この土地にマイホームをもつてから、というより、建売分譲住宅用地であるこの物件との契約が成つてから、度々見る夢があった。

夢はいつも、「細道を上っていくと、木々の重なり合った斜面に出る。木々の間には、夥しい石の塚が並んでおり、そこからいくらかもいかないところに、青白い煙のくすぶる窪地があり、傍で、故人を偲ぶ人々が涙に噎んでいる……」というものだった。

夢は、決まって朝方に訪れた。

とくに、激しく胸をかき乱されたり、息苦しかったりしたという思いはないのであるが、目が覚めたとき、耳の内にかすかな自分の唸り声が残っていた。

私は歯ブラシをくわえたまま、先に起きて台所に立つ妻に、何度その夢のことを話し出そうとしたかしない。

しかし、私のそんな鬱陶しい気配を感じるらしい妻は、「よしてよ、朝一番から気が滅入るつたらないわ」と、なにも話さないうちに私を遮ってしまった。そして、純一が目を覚まさないようにと、私を洗面台に押し戻し、「大きな水音をたてないでね」と、小声で牽制するのを忘れないのだった。

この土地は、はじめ見たとき、穫り入れ前の稲穂が風に靡いていて、田圃の畔には、年代を経た柿の木が枝を引きずるように無数の赤い実をつけていた。

特急電車の停車駅から、徒歩で七分。現地は、閑静な古い住宅街に囲まれていた。

駅前には、マーケットが三つ、女子大が二校あり、県庁所在地である福岡市に伸びる国道には、トラックやタンクローリーなどの車が十数台も数珠つなぎになっていた。

この街の中心となる太宰府市役所も、現地から南へ一キロと離れない国道沿いにあり、いわばこの土地は、古い街並みのなかにポツリととり残された、希有の処女地なのだった。それでいて、不思議なほど地価が安い。といっても、私たちに手が届くのは、せいぜい三十坪程度でしかなかったが。

私も妻も、不動産屋の説明を詳しく聞くまでもなく、この土地が極め付けの一等地であることがよくわかった。それもそうで、福岡市のアパートに住みながら、とくにこの丸一年というもの、不動産の広告という広告、雑誌、口コミでの情報などを通じ、これはと思われるところは殆ど調べ尽くしていた。

一年を経ての結論は、福岡市近郊には自分たちに手の届く物件はない、ということだった。たとえあったとしても、途方もない通勤方法を強いられたり、純一を診せる病院が五キロも十キロも離れていたりした。

とにかく、私の頭に焼き付いたこの土地の印象は、あたりの古い住宅街の静寂をそっくり映しとったような穏やかな稲穂の輝きと、鈴なりの赤い実をつけた二本の柿の古木との、牧歌的な風情の様だった。

それに、住宅街の北側の一角には、忠魂碑みたいな碑文が立つ小さな丘があり、駅から徒歩で七分という位置にあるにもかかわらず、間近にそんな喧騒があるということを感じさせないほど、そこにはしんとした空気が流れていた。

私たちは、アパートに戻る道々、あの稲穂の上に立つ、二十坪のわが家を想像し、間取りまで考え、造り終えていた。私も妻も、一目でその土地が気に入ったのだった。

わずか三十坪の建売分譲住宅とはいえ、年収の六倍もの買物になる。全く躊躇がなかったといえば嘘になるが、私たちはその場で、即座に決断した。

それより、十分な頭金の準備をしてこなかったことを悔やんだ。これほどの物件だから、いくら取り敢えずの手付けをしたとはいえ、こうしている間にも正式な買い手がつくのではないかと、気掛かりでならなかった。

しかし、私たちの心配は徒労に終わり、首尾よく第一に希望する東南の角地を手にする

ことができた。

聞いたとおり、不動産屋は穫り入れが済むと、間をおかずに整地をし、十二区画の建売分譲用地として売り出した。その用地は、予想に違わず一週間と経たないうちに、全区画が売り切れてしまった。

「運がいいですよ。整地する前に好みの場所を選べるなど、さらにはありません」

鷺鼻に銀縁眼鏡をひっかけた不動産屋の社長は、私たちに会う度にそういった。

私たちは、あの重たげに実っていた稲穂も、年を経た柿の木もなくなった土の上に立ち、盛られたばかりの新しい土を掬い、踏みしめ、改めて周囲を何度も眺めわたした。

百万都市である福岡市から十数キロ離れただけの、それも特急電車でもわずか十五分という位置に、探し求めていた土地を手に入れ、とうとうマイホームをもつことになった。

結婚して八年。私は、三十六歳になったばかりだった。

七歳の純一は、季節を問わず風邪をひいた。風邪をひくと喉をひき絞るように咳き込み、激しく吐いた。食物を受け付けないのだから、吐くものなどなにもない筈であるのに、胃や腸がひっくり返りそうな音をたて、目を剥いて大量のものを吐いた。

それが二時間も続くと、体中から力が抜け落ち、呼んでも目を開けようとすらしなくなる。息は荒く、腹部は年寄りのそのように濁み、口を開けたまま眠りに落ちる。

自家中毒……耳慣れないこの病名を聞いたのは、純一が一歳の誕生日を迎えた翌日のことだった。

初孫の誕生祝いということで、私と妻の両方の両親を呼び、それに私たちの兄妹も交えてアパートでパーティーを開いた。パーティーといっても、いつもの顔ぶれを一度に集めただけで、殆どアルコールの飲めないみんなは、妻の手料理と、寿司とジュースとケーキで、ひとしきり賑やかに騒ぎ、帰っていった。

少しばかり鼻水を垂らしていた純一は、最初いくらかとまどっているふうであったが、慣れるにつれ機嫌をとり戻し、みんなの手から手へ渡り、カメラのフラッシュを浴び、ケーキをお代わりし、野菜と白身の魚を煮込んだ離乳食を全部食べ、拍手をもらって歩行器のなかで跳ねていた。

はしやぎ疲れて早目に眠った純一が目を覚ましたのは、後片付けを終え、私たちが寝ようとした十二時頃だった。

乾いた咳をいくつかしたと思ったら、仰向けのままいきなり激しい嘔吐をし、吐瀉物が

鼻に口に首のまわりにと、降ってきた。それは、一度宙に打ち上げられ、そのまま降ってきた、という形容にぴったりの光景だった。

純一は、吐瀉物が喉につかえたのか、目を白黒させ、声もたてずにもがき始めたが、妻が急いで抱き上げると、泣き声をたてるより先に、一度目のときよりもっと激しい嘔吐を妻の胸元にとばした。

妻は、純一の二度目の嘔吐が止むのを待って、汚物をタオルで拭い去ると、「大丈夫。熱はないし、少し食べ過ぎたのね」と、明るい声でいった。

「みんながお祝いにきてくれたんだもの、喜び過ぎたのよね」
妻は、落ち着き払っていた。

その晩、純一は二、三十分おきに嘔吐を繰り返し、五、六度目には血の色をしたものをどつと吐き、あとは首を落としてとろとろ眠っていた。

私たちは、それでも病院に駆け込もうなどとは思わなかった。あいかわらず熱はなく、吐き気が込み上げてくるとき以外は、静かな寝息をたてている。

「明日、一番に診てもらおうからね」

妻は、蒸しタオルで純一の汚れた指の一本一本を丹念に拭いながら、微笑を浮かべていた。

翌朝、私たちは、駆け込んだ小児科の医師から、「殺すつもりだったのか！ 熱でも咳でもない、吐くときが一番恐いんだ」と、いきなり怒鳴り付けられた。

吐き下しを続けると、脱水症状をひき起こし、脳障害が残ったり、ひどいときには死に至ることさえある、というのだった。

純一は、既に、そのひどいときの場合にまで至っていた。

体中のありったけのものを吐き、もう唾液さえも出ない状態になっていた。呼び掛けても反応せず、全身はクラゲみたいなたよりなかった。

一日六本の点滴を二日間受け、かろうじて危機を脱した。しかし、その後も経過は思わしくなく、結局、二週間もの入院をする羽目になった。

純一の自家中毒は、最初の発症から間をおかず、ほぼ一月に一度の割合で起きた。それからというもの、ほんのちよつとした風邪をひいたと思うと、必ず点滴、入院ということになった。

医師も、「一年一年抵抗がついて、学齢に達する頃には治る筈だから、余計な心配はしないように」、といていたのが、小学校に上がると、さらにひどくなった。だから、学校にいる時間より、家や病院で過ごす時間の方が長かった。となると、勉強の遅れも心配だったし、なにより最初、自分の処置がもたついたために発病のひき金をつくった、と思いついでいる妻の精神状態が微妙な具合になってきた。

風邪をひかすまいと、純一に手を洗わせ、何度もうがいをさせた。妻自身も同じことをし、私にもそれを強いた。妻は、食器や食物の洗浄に過度に敏感になり、今すすいだものをまたとり出してすすぎ、それがまだ納得できないと、またすすぎ直し……という具合であった。

妻の神経は、食器ばかりでなく、衣類にも部屋の換気にも、天気にも向けられた。私が、外から帰りしなにくしゃみでもしようものなら、めざとく見つけ、「こんなときには、帰ってこないで。お金のことなかまわれないから、どこかに泊ってくるのよ」と不機嫌にいい、決して純一に接触させようとしなかった。

医師は、「もともと自家中毒の原因は精神的なものが主であり、風邪は二次的なものであるから、この際、郊外へでも引っ越してみたらどうか」と勧めた。街の生活になじめない病弱な子が、環境が変わった途端、嘘みたいに治ったという例がいくつもある、というのがあった。

私たちは、医師のことばに賭けてみることにした。

その日から、不動産の情報が、私たちのすべての関心になった。目標は郊外であるが、やはり万一の場合を考えて、いざというときにはすぐに設備の整った病院に駆け込める、福岡市から二十キロ程度以内を限度とすることに決めた。

分譲住宅の建築は、驚くほどのスピードで進んでいく。

骨組みと瓦だけだったものが、一週間見ないうちに、黒い壁紙がめぐらされ、二階の板が張られていた。ぐらぐら揺れる作業用梯子を伝って上ってみると、張られたと思った板は、実はただ作業用に並べられただけの木目の粗い板で、大きな隙間から足元を透かし見て、改めてその高さに身が縮む思いがした。

私たちは、週末には必ず現地に来て、自分たちが思いつく限りのアイデアを出し、何十回も書き直してきた図面のとおりによりに工事が進められていくのを、時間を忘れて眺めた。

あと一月すれば、この三LDKが自分たちの家になる。

居間はできるだけ広く、採光を十分に。純一が将来入る部屋は、この家で最も条件に恵まれた二階の東南に、と三十坪の敷地を最大限に生かした設計になった。

この家に越してくれば、純一の虚弱な体も本当によくなるのではないか、という確信に似た思いを抱かせるほど、眩しいばかりの陽光が注ぎ、それでいて、どこかで鳴いている虫の数さえ聞きとれそうなほど、あたりは静寂に包まれているのだった。

それに、しばらく不安定だった妻の精神状態が、日に日に回復してくるのがそれとみとれるのは、なにより嬉しかった。

しかし、私の夢のなかに、いつからとははっきりしないのであるが、奇妙な風景が現われるようになっていた。

夢が度重なるにつれ、私は、意味もなくそれは、あの分譲地にかわりがあるのではないか、と思い始めた。

—深い木々の向こうにかすかにのぞいている、無数の石の塚。そこからいくらもいかないうちの藪に囲まれた窪地に、青白く立ち上る細い煙。煙は、ときに躊躇うように低くたなびいたかと思うと、やがて空に向けて気怠そうに上っていく。とまどいがちに、しかし、そこに定められた道筋でもあるかのごとくにあわあわとした空の青の一所に流れ入り、溶け込んでいく。傍らでは、故人を偲ぶ人々が頭を垂れ、涙に噎んでいる—

私は、自分の夢が、その自分の思いが、見当外れなものであることを祈った。

一日と明るさをとり戻してきた妻や、契約を交わしてからというもの、もう一月以上風邪の兆候を見せない純一の、どこか赤みを帯びて見える寝顔……。

勿論、自分の夢のことなどなんの根拠もなく、なんの意味もないものであるのかもしれないのだから、このような大事を前に、世帯の長としての自分が思いめぐらす類いのことではないのである。

であるから、夢を見た朝は、頭の中いっぱい詰まった希薄な靄に似た思いを懸命に振り払い、妻にも告げず、黙って出社した。

今になって思えば、なぜ私は、自分の直感を素直に妻に切り出さなかったのか、と悔やまれてならない。私は、なぜあんなに妻と純一の日々の表情の変化に、過度とも思えるほど受身に接することしかできなかつたのだろう、とほぞを噛む思いである。

私たちが入居したとき、ほぼ同時に完成した十二棟の住人たちも前後して越してきた。隣接する古い住宅街の敷地が平均して百坪を越えるのに対して、私たちの分譲地の平均は三十五坪、といったところだった。

しかし、狭くとも一戸建ては一戸建て。車庫も坪庭もあり、陽当たりも申し分なかった。それに殆どの世帯が三十代と若く、同時の入居ということもあり、隣組も分譲地だけで構成し、期せずして忘年会の企画がもちあがった。

建築中のときには考えなかったことであるが、十二戸が全部入ってみると、まるで団地の延長であった。

南に六戸、北に六戸と分かれた間に設けられた四メートルのアスファルト道路では、子供たちの転がす三輪車や、自転車や、ラジコンが音をたててとび交った。

それを横目にしながらの母親たちの集まりが、道端にできた。私たちの玄関先が一番陽当たりがよいため、格好の溜り場となり、アスファルトに車輪の軋む音、ラジコンの唸り、子供たちの叫び、泣き声、それに母親たちのいつ果てるかもしれない冗舌が、一日中わが家を包み込んだ。

新しい環境にどう馴染んでくれるだろうかと心配した純一は、一週間、二週間と風邪をひかなかった。妻がひやひやして見守る目を盗んで、ときどきはアスファルト道に下り、自転車や三輪車のいき交う様をぼんやり眺めるようになった。

「いいじゃないか。冷たい風に当たるな、手を洗え、うがいをしろもいいけど、本当は汗びつしよになり、泥に汚れ、遊びながら育つのが一番だ」

妻のびくびくする様子をなだめるように、私はいった。

もしかしたら、この郊外の分譲地に移ってきたことで、純一の体のどこかに好ましい変化が起き始めているのかもしれない。そう、自分自身にいい聞かせ、信じようとした。

純一が顔を痣だらけにし、唇に血を滲ませて戻ってきたのは、穏やかな陽射しの降り注ぐ十二月の土曜日の午後のことだった。

妻はマーケットに出かけ、私は玄関口の騒がしさを気にしながら、翌週までに会社に提出しなければならぬレポートの素案を練っていた。だから、玄関を開け、純一が私の横をすり抜けて居間に入ってきたのに、しばらく気付かなかった。

小さくすすり上げる声があるので振り返ると、純一がソファに横座りになり、肩を震わせていた。驚いた私が駆け寄ると、純一は反射的に横を向いた。

額と目の下に大きなこぶがあり、歯茎から血を流していた。「どうした？」と聞いたが、答えない。

私は、素足のまま玄関にとび出した。正面に、五、六人の主婦の視線があった。「なにごとか」、という怪訝な面持ちである。私の表情が、きつとただならぬ態をしていたのだつたろう。

私は、彼女たちの一人一人の目の色のなかに邪気のないのを確かめると、後ろ手に玄関を閉め、ふっと溜め息をついた。自分のあわてようが、少し気恥ずかしかった。

純一は、あいかわらずソファーにいて、ただ体を小さく震わせるだけで、口を食い縛り、一言も洩らさない。目尻には涙の流れた痕が残っており、厚手のジャンパーの袖のあたりに、五センチほどの引き裂いたような破れがあった。

私は、しかたなく、純一が一人で転んで砂利に顔面を打ちつけたのだ、と苦しい解釈をした。

マーケットから帰ってきた妻が、純一の傷に気付き、あわてて抱き寄せたが、いくらか落ち着いたかとみえる純一は、無表情に首を振るばかりだった。

それは、一つの始まりであった。

三日もしないうちに、下校中に純一が五人の同級生に囲まれ、スリッパ入れて顔を殴られ、胸倉をつかまれて腹を蹴り上げられ、排水溝に転がされているところを妻が目撃したのだった。妻は、乗っていた自転車を倒したまま走り寄ったが、五人は裏手の忠魂碑の丘に逃げ込んでしまったという。

妻の怒りは、尋常ではなかった。五人が五人とも分譲地の子だという。それも、私があわてて玄関からとび出したあのととき、彼らの母親は全員そこにいたというのである。

「おかしいと思ってたわ、以前から。みんないつも私を遠巻きにして、背中を突っ突きあつてるの。挨拶をしても、なにもいわず、にやにやするばかり」

妻は一人一人の名前をあげ、「あなたがとび出していったとき、あの人たち、なにも知らないことなどなかったのよ」と、私がいい笑いにされた、といわんばかりである。

「ちよつと待ってくれ。分譲地の子だということ、それは確かかい？ 万一、勘違いということだってあるかもしれないじゃないか」

「そんな悠長なこと、よくいつてられるわ。目の前で、純一が殴られ、蹴られるところを見たのよ、はつきりと。手加減など、これっぽっちもない。スリッパ入れの風を切る音が、

次から次に：：身震いするほどすごいのよ」

妻は顔中を真っ赤にし、いまにも加害者の家に怒鳴り込んでいかんばかりの剣幕だった。傍の純一は、私たちの激しいことばに怯えたふうに目を閉じ、それでも相手が誰なのか、唇を噛んだままいおうとしなかった。

私はその翌日の明け方、胸に重石をのせられたような息苦しさに見舞われ、目を覚ました。例の夢であった。

分譲が始まる前から度々見る夢のことを、妻に話したのはこの朝が初めてだった。妻は目覚めていたのか、乾いた声で「そう」と、そっ気ない返事を返してきた。

「アホ、馬鹿、間抜け、トンカチ頭：：」

玄関先で大きな声がしたので顔を出すと、五人がさっと背中を見せて逃げていく。一人でもつかまえようとスリッパを突っかけて走り出そうとするのだが、彼らは瞬く間に露地奥に消えてしまう。

いまいmissさに振り返ると、ブロック塀の下にうずくまっている純一。純一は、両腕で頭と顔を覆い、紐の千切れたランドセルをアスファルトに放り出したまま、声もなく震えている。

ふとあたりに目をやると、なにごともなかったというふうに乳飲み子を遊ばせている主婦たちのうしろ姿。

これはたまの代休の日に私が見かけた光景であるから、普段はいったいどんなだろうと心穏やかではない。妻に尋ねると、「いつものことよ」と軽くいなされてしまった。

「こんなとき、黙っていいのか」

私が詰ると、「よくないに決まってるじゃない。あの子たち、殺してしまいたいくらいよ。でも、あなたが止めたのよ、最初。縁あって同じ分譲地に住むことになったんだから、よい隣人でいようって」と、投げやりな口ぶりになる。

「しかし、問題だぞ。放ってたら、純一はどうなる？ 片端にされるくらいじゃ済まないと違うか」

私は、忿懣やるかたなかった。

「もう、二月以上になるわ。でも、純一、自家中毒にはかかってないのよ。これって……やっぱり小児科の先生のこと、当たったのかしら」

妻は、まるで表情のない声でつぶやく。そんなことは、私だって知らない訳じゃない。

しかし、学齢に達したら自然に治る、ともいった筈だ。とはいえ、六年もの間、自家中毒に怯えてきた私たちには、確かに大きな光明であるといえなくはないのであったが……。

分譲地の子たちは、抜け目がない。

私も組内の行事にしばしばかり出されるのであるが、純一を連れて子供会のソフトボールの手伝いにいったときのことである。チームに加わっていない純一は、私と一緒にグラウンドにいくのをしぶっていたが、妻が急用で福岡市に出かけなければならなくなったため、仕方なく連れて出たのだった。

純一は、私のうしろに隠れるように立っていたが、私のノックの球を返球するとき、子供たちは決まって球を大きくそらすのである。そして、その球を私のうしろまで拾いにくる。

そのうち、うしろの方で鈍い音がし、かすかに純一の呻き声があがり始めた。ノックをしながら注意していると、彼らは私が背中を向ける瞬間、純一に近付きグローブの先で突つき、足で蹴り付けていく。

私の背後には、練習を見ている主婦たちが四、五人いるのだが、そんなことにはまるで無頓着という態である。

私の頭にカッと血がのぼった。「なんで真直ぐ返球せんのか！」と一喝し、彼らを並ばせると、一人ずつ思いっきり頬っ面を張り飛ばした。

血相を変えてとんできたのは、主婦たちだった。

太宰府市役所の北方約一・五キロ。

私は市内地図をとり出し、方位と距離を定規で計った。

太宰府市役所の北方一・五キロは、まさしく忠魂碑のあるあの丘に当たる。あの丘のあたりが平安初期の送葬の場の跡？

とすると、いつも夢に出てくる木々の間に見える石の塚とは……もしかして、この分譲地のあたりになるのではないか。そして、石の塚に続く藪に囲まれた窪地、つまり焼き場跡は、我が家の真下？

そう考えたとき、私の頭のなかでフィラメントが炸裂した。一本のよじれていた紐が、鋭くピンと張りめぐらされた。

私は、ズックを履くと、地図を握ったまま古い住宅街を歩いた。休日の住宅街は、私の

たてるズツクの音が、あたりのすべてに鈺するのではないかと思われるほど、しんと静まりかえっていた。

住宅街を北に抜け、忠魂碑のある丘の上り口に立った。考えてみれば、この丘の下は頻繁に通るのだが、丘に歩み入ったことは一度もなかった。したがって、忠魂碑がどんなものか、丘の上がどのようなになっているのか、まるで知らない。

私は、冬枯れの石ころ道を上っていった。上り始めてすぐ目に付いたのは、太宰府市教育委員会という札の下がった縄の張りめぐらされた区画だった。それは、上り口から五分とかからないところにあつて、傍に「金輪寺跡発掘現場」という立て札が立てられていた。私の足がわなないた。

戻ると私は、「この家、越すぞ」と妻にいった。妻は、一瞬意味を解しかねているふうであったが、弱々しく首を振り、「せっかく手に入れた家じゃない。全然、気に入ってないことはないし、この家のために背負いきれないほどのお金を借りているのよ。それに、純一はまだ一度も自家中毒を起こしてないわ」という。

「自家中毒より怖いものがある。純一は、アパートの頃よりもっと怯えきっている。これによく自家中毒にならないものだ、と感心する。もしかして、とてつもないマグマを溜め込んでいるんじゃないかと、不安でならない」

「私は、純一はあれで結構芯が強い子だとわかったの。毎日生傷が絶えないのに、学校にいかないなどといったことないのよ。担任の先生も、この頃いづらか事情をわかってくれて、学校にいる間はかなり庇ってくれるし……」

といいながら、妻も悔しさがこみ上げてきたのか、しまいには涙声になってしまった。

用水路の拡張工事に、市が着手することが決まったという話が伝わり、分譲地は歓声に包まれた。歓声は、正確にはわが家を除いて、ということになるのであるが。

越してきてまもなくの頃、台風崩れの大雨で、わが家の塀に接している分譲地の前を流れる用水路が溢れ、十一軒が床下浸水となったのだった。浸水は一週間おいて、もう一度襲ってきた。

その原因は、もちろん観測史上稀にみるほどの集中した雨量によるものではあったが、灌漑用の狭い古びた用水路を、住宅地となつたいまも、深さや幅を整備することなく、そのまま生活用水路として使っているため、十分な水の抜け道にならなかったというのだっ

た。

唯一被害のなかった私もメンバーに加えられた「被災住民」たちは、仕事を休み、市役所に陳情に押しかけた。区長や市議にわたりをつけ、二波、三波と陳情を繰り返した。こういったときの分譲地のまともりはすごかった。

その陳情の成果が現われたのである。

説明によると、用水路に面した私たち南側六軒の庭先一メートルを削り取り、市に提供するようになる、というのだった。

もつとも、用水路の整備拡張が成れば、このあたり一帯、考えられ得る限りの雨の量からの心配は、今後一切なくなるであろうという。

「これでみな、安心して住めますね」

「水さえ出なければ、庭先が少々削られることぐらいやむを得んでしよう。福岡市にも近く、最寄りの駅にも近く、マーケットの便もよく、そのくせ静かときている。こんな恵まれたな場所、めったにないですから」

北側の住人たちも南側の住人たちも入りまじり、かわるがわる苔むした用水路を覗き込んで、水路側に植えたラカン槇の剪定をしている私にも相槌を求める。

「決心がついたわ。お金など問題じゃない」

妻がなにをいい出したのかと、思わず見上げた。そのくぐもった声に、強い感情がこもっている。妻はカーテンの隙間から、用水路に屈み込んでいる住民たちを見詰めている。

「夢のとおりよ、あなたの……」

妻の目は濡れて光り、唇を激しく震わせている。「いい気なもんだわ」妻の視線の先には、みんなを純一にけしかけるボスだという子の、母親の高笑いに似た顔があった。

そのとき、二階で呻き声があがり、続いて建具の倒れるような音がした。

私たちは、瞬間、目を合わせた。〈純一の自家中毒が再発したのだ〉やっぱり、くるものってきた……。

私より妻の方が先に二階に駆け上がった。その妻が、今度は悲鳴をあげる。そして、上がったばかりの板の間に、膝から崩れ落ちてしまった。

私が見たものは、信じられない光景であった。

純一が、純一ではない。

純一の手には、私が仕事で愛用しているカッターナイフがあった。そのナイフを逆手に

握り、襖に切り付けている。切り裂かれた襖は、ずたずたになり、麵の屑みたいにあたりにとび散っている。

畳もだった。畳と襖の切れ端が、ぼうぼうと音をたて、ススキのように、そこらじゅうにそそけ立っている。

純一の習字道具入れ、ノート、教科書、国語辞典。転入のときにあつらえた洋服や押し入れの布団。

なにかもめった切りである。六畳の間は、ボロ屑の山だった。

私は、純一の手にとびつき、ナイフを叩き落とした。そして、純一の顔面を、平手で十回ばかりも力まかせに殴りつけた。

間があった。あたりがゆっくりと、ぐるぐるまわっている。そんな奇妙な間があった。

と、純一の青ざめてこわばっていた頬にいくらか赤みがさし、顔が一瞬四角に歪んだかと思うと、突然叫び声をあげ、私の胸に体当たりしてきた。

私は、鼻の奥に突き上げてくるものを懸命に飲み下そうとしながら、火がついたように熱い純一の体を、両腕いっぱい力に限り抱え込んだ。

(了)